
誓いの桜

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誓いの桜

【Zマーク】

Z0797P

【作者名】

まあ

【あらすじ】

D・C・? 一次創作です。

桜内義之の隣に住む『前田紫音』、『前田久遠』兄弟を中心起こるバカ騒ぎ。

前田兄弟は桜舞う初音島で何を思い、生きるんでしょうか？

まあが書く物語の原点がここにあります。（苦笑）

自サイト『悠久に舞う桜』でも連載しています。

設定

前田 紫音
マエダ シオン

性別 男

子供の時に両親の再婚により久遠と兄弟になる誕生日は一緒に紫音が兄。義之、音姫、由夢、小恋、日向とは幼なじみ。実母が異能者なため除霊やおまじないができるが内緒にしている。写真部に所属しているが他に学園内で何でも屋を行っているため何でも器用にこなす。成績は学年ベスト4（紫音、久遠、杉並、杏）に入る秀才。6年前に交通事故に遭うが奇跡的に無傷。音姫からはしー君と呼ばれている。

趣味 シルバーアクセサリー作成、占い

前田 久遠
マエダ クオノ

性別 男

両親の再婚により紫音の弟になる。再婚前の名字は天枷。付属の剣道部の主将を勤めており全国大会に出場するほどの腕前。紫音同様成績は学年ベスト4。

音姫からはくーちゃんと呼ばれている。趣味 お菓子づくり

前田家家庭状況

両親は本島にある天枷研究所の第一研究所に勤務しているため一人暮らし。一人とも家事は得意で朝倉家の向かいに住んでいるので義之たちと夕食を食べることが多い。

和泉 日向
イズミ ヒナタ

性別 男

紫音たちと幼なじみだが、付属を卒業した後に、本島に引っ越している。紫音、久遠とはよくメールと電話でやり取りしている。

綾瀬 アヤセ
遥 ハルカ

所属 付属2・1 演劇部

由夢とは去年も同じクラスで仲の良い友人。明るく裏表が無く人懐っこい、子犬タイプの女の子。紫音からワンコ扱いされているが特に気にしていない。成績はあまり良くなく、テスト前に由夢や前田兄弟に泣きついて勉強を教わっているため、奇跡的に赤点は無いがおバカな子。運動神経は良いがドジっ子のため良く転ぶ。演劇部では役者をしており役を演じ始めると人が変わりその役を完璧に演じる。

天海 タクト（アマミ タクト）

所属 付属2・1 剣道部

遙の従兄兼保護者。何でもこなす前田兄弟の事を尊敬している。性格は真面目で融通が利かないが天然ボケの一面を持つ。騒ぎを起こそ杉並を敵視しているが、いつも紫音、杉並、遊月の三人に言いくるめられ悪事の片棒を担がれるためいつの間にかブラックリスト入りしている。成績は上の中。剣道部では付属2年のエースで次期主将候補。

八雲 ヨヅキ
ヤクモ

所属 付属3・2 剣道部、非公式新聞部

剣道部の副主将で非公式新聞部にも所属している。真面目な人間をからかう事が好きで麻耶やタクトをからかって遊んでいる。性格は明るく活動的でいつもおちやらけているが決める時には決めるため、後輩や同級生からの信頼は厚い。

剣咲 ケンザキ
統吾 トウゴ

紫音が異能の仕事を行う時の相棒。警察官で靈関係（心霊現象や魔法、呪い）の事件を担当する部署に勤めおり、紫音が靈関係の仕事を始めた時に知り合つ。靈力は高いが扱いきれず、事件の原

因だけでなく周りのものも破壊する。細身の長身で一見、弱そうに見えるが剣道、柔道の有段者。仕事を行う時には刀に自分の靈力を宿らせる。口は悪いが面倒見が良く、部下には信頼されているが上司からは嫌われている。この部署に配属されて最初の相棒を自分のミスで失っているため、部下や相棒を大切にしている。紫音からは「けんさん」と呼ばれている。

プロローグ

(……また、この夢か？)

6年前の事故の夢

自分を中心につつも一緒にいた幼なじみ達が泣いている。

幼い自分にも理解できる。

僕はもう助からない。

いつもの帰り道の当たり前の光景にトラックが突っ込んできた。

動けなかつたアソツを突き飛ばして助けることはできたけど

自分が死ぬことは考えてなかつた。

幼なじみ達が『死なないでー』と泣いているのを聞きながら、意識が薄れゆくのがわかる。

(……無理かな?)

僕自身が生きることを諦めていた時に、

……聞こえたんだ。

「……キリの願こは何?」

僕の願いは

……まだ生きていたい。

……みんなと一緒にいたい。

……そしてアイツに……たい。

そう願った時、

確かに聞こえたんだ。

「……この桜は真摯な願いを叶えてくれる魔法の桜なんだ。
だから
大丈夫だよ」

第1話

(……つたぐ、いつものことでも自分が死ぬ夢を見るのは気分が悪いな)

紫音は先ほど見た夢の夢見が悪かつたため、尋常な量ではない脂汗をかいている。

(……時間は？ まだ起きるには早いな)

紫音は枕元にある目覚まし時計で時間を確認するとまだ起きる時間には早く、

(2度寝でも……つて言いたいところだけどあの夢を見た日はいつも眠れないからな……つたぐ、自分の事ながら、心が弱いな)

2度寝をしようと布団を被るが今まで、あの夢を見た朝は2度寝ができる事がないため、大きなため息を吐くと、

(……久遠が朝練に行く前に朝飯でも作つてやう)

起きると決めて着替えて居間に移動する。

「おはよー。久遠」

「あれ？ 兄さん、おはよー。今日はずいぶん早いね」

紫音が欠伸をしながら居間に着くと弟の久遠が剣道部の朝練に行く準備を始めており、欠伸をしている紫音を見て苦笑いを浮かべる。

「ちょっと嫌な夢を見てな。2度寝すると起きる自信無いから、朝飯でもゆっくりと作るわと思つてな。少し待ってくれるか?……あ、いつもより早いと思つたら、今日は遊月と打ち合わせか?」

「うん。朝練前に遊月と練習メニューを決めようと思つてね。『めんね。兄さん、俺はもう行くよ』

「……ああ、引き止めて悪かつたな。気をつけに行けよ」

「わかつてゐよ。兄さん、学校でね」

久遠は時間がないようで急いで家を出て行き、紫音は久遠を玄関まで見送り、

「……仕方ない。一人で寂しく食べますか」

大きく体を伸ばした後、キッチンに移動する。

第2話

(……また、朝から何をやつてるんだ?)

紫音は登校時間がきたため、家から出ると幼なじみの『桜内義之』、『朝倉音姫』、『朝倉由夢』が義之の家の前で何かやつている。

「音姉の作る弁当は美味しいからね
思うところもの3倍は軽く張り切る
てんの?」

「お弁当作りと毎つてーー。」

(……)

紫音は聞こえてくる会話にため息を吐くと、

「今からじや無理だから」

急いで義之の弁当を作ると言つてこる音姫を制止する。

「「「おはよー」」」

4人は朝の挨拶をした後、

「義之、面白いのはわかるけどあんまり音姫さんをからかうなよ」

「やつだな。まさか、本当に弁当を作らうとするとは思わなかつた」

紫音はため息を吐きながら、義之に音姫をからかうなと呟つと義之は苦笑いを浮かべるが、

「ちょっと、しー君、弟くん、面白いってどういう意味かな？」

「そのまんまの意味」

音姫は頬を膨らませるが紫音と明久は学園に向かい歩き出す。

「弟くんもお弁当欲しいんなら前の田に寄り合おうね」

「別に欲しかった訳でも無いよ。ただ何となく言つてみただけ」

「兄さん、お姉ちゃん急いでください。今日はクラスを確認しないといけないんですから」

学園に向かい歩いていると由夢は義之と音姫が2人で話しているのが気に入らないのか憤りとつい、義之の手を引っ張るが、

「由夢ちゃんは1組だよ。義之と俺は3組で音姫さんもう3組」と

紫音は携帯電話を眺めながら、自分を含めた4人の新クラスを話す

と、

「しー君、何で知ってるの？ 今度は何をしたの？」

「酷い。俺、まだ何もしてないのに。音姫さんは俺や久遠のこと弟みたいなものって言う割に俺のこと疑っているんだ。しくしくしく

音姫は紫音がまた何かしでかしたと思ったようで紫音に呟つと紫音

はわざと泣き声をし、

「えっ！？ そんなことないよ。しー君、ゴメンね。お姉ちゃんを許してお願い」

普通なら引かからない嘘泣きに音姫は目で涙を浮かべて本気で謝る。

「紫音さんホントのところ、どうしてそんなこと知ってるんですか？」

「久遠が先に行つてクラス表を確認して連絡くれただけだろ」

「義之正解！」

「他の面子は？」

「久遠、渉、杉並、小恋、杏、茜だ。後は麻耶も一緒だったな」

由夢が紫音がクラスを知っている理由を聞くと義之は久遠が連絡くれたと言い、紫音は嘘泣きを止めて言うとそれを見て、音姫は頬を膨らませて怒っているが紫音は音姫を無視しながら義之と話を続ける。

「麻耶って誰だ？」

「お前なあ。同じクラスになるの三度田なのに薄情な奴だな。沢井麻耶。委員長のことだろ」

義之は聞き慣れた名前その他に知らない名前が混じっているため、紫

音に聞くと紫音は呆れ顔をして囁く。

「……そういえばそんな名前だった気がする」

「しかし、大丈夫ですか？」

「何がだ？」

「紫音さん、兄さん、板橋さん、杉並さんの4バカ勢ぞろいじやないですか」

由夢は紫音と義之のクラスが危険だと聞いたげに囁くと、

「……作為を感じるな」

義之も何か引っかかったようだが、

「面白そつだる」

紫音は楽しそうに笑っている。

「今回のクラス分けの原因はまゆきさんにあるんだけど。覚えているか？卒パの後、俺達を一つのクラスにまとめるって理事長に直訴しに行つたの」

「そんな事もあつましたけど、でもそれだけで」

「付属も今年で最後だし伝説になつてゐる純一さん達の世代に負けない悪名でも残そうと思つて、俺が杉並達非公式新聞部、その他もろもろの力を借りてこのクラスにした訳だ。監視しやすいようにま

とめたつもりだらうが生徒会の思い通りにさせない」

紫音は邪悪な笑みを浮かべて笑つており、

「えーとね。しー君、弟くんできれば大人しくしてくれるとお姉ちゃん助かるんだけど」

「音姫さんの頼みでも売られたケンカは買えが家訓なんで無理ですね」

音姫は紫音の様子に苦笑いを浮かべるが紫音は楽しそうに笑つている。

第3話

「「おはよう」」

紫音と義之は教室に入ると2人の友人もあり、雪月花と言われている女の子『雪村 杏』、『月島 小恋』、『花咲 茜』が話をしているのを見て、声をかける。

「おはよう。義之くんに紫音くん」

「どうしたの義之にしては早いぶん早いじゃない?」

「杏、俺がいつも遅刻してるよつた言い方やめや」

茜は紫音と義之に手をあげて挨拶をするが、その隣で杏はわざとらしく義之が遅刻しない事に驚いたと言つと義之は杏に反論しはじめる。

「ん? 小恋、ずいぶんとボロボロだな?」

「うん。ちゅうと……」

紫音は小恋が肩で息をしているのに気づいて声をかけるが、彼女の息は整わず、苦しそうに返事をする。

「紫音、小恋がボロボロなのは朝からお盛んなだけよ。なんたって小恋はエロ女王だから」

「私はエッチじゃないよ……！ クラス表を見に行つたりす」い人で

「こんな風になつただけだよ……。」

「小恋ちゃんは人”みのなかで、もみくじやにせねる」と悦びを感じていたのねえ」

「さすがは小恋。考へる」ことが違つわ」

そんな小恋を見て杏と茜が小恋をからかい始めると、

「朝からイチャイチャと見せつけたんの？　見せつけたんの？」

「ウザい」

『板橋　涉』が朝から鬱陶しいテンションで駆け寄つてくるが、紫音は涉を交わすと笑顔で涉の腹を殴りつけ、

「し、紫音、いきなり、何するんだよ？」

「麻耶。初のクラスメートだな。今年一年よろしく頼む」

「……前田、あんたは朝から何をしてるのよ」

紫音は腹を押さえ悶えている涉を無視し、『沢井　麻耶』に声をかけると彼女は紫音の相手をするのがうんざりだと嘆いた様子でため息を吐く。

「朝から見るに耐えない顔が出てきたからな。麻耶もやつ思つだろ

」

「……確かに板橋には朝からかわり合つたくないけど、あそこま

する必要はないでしょ。後、何度も言ひてゐるナビ、名前で呼ぶの止めよね」

麻耶は紫音に名前で呼ばれる筋合いはないと言つが、

「呼び方は俺の勝手だから無理だな。後、麻耶。俺と麻耶のなかだろ前田じゃなく、紫音って呼んでくれ」

紫音は麻耶で遊ぶ事を決めたようで優しい笑みを浮かべると彼女の手を取り、まっすぐと彼女の瞳を見つめる。

「な、な、な、何を言つてゐのよー?」

麻耶はいきなりの紫音の行動に顔を真つ赤にして慌てる。

「何だよ。俺の気持ち気づいているんだろ。そりそろ麻耶の気持ち教えて欲しいんだ。なあ、俺じゃ……ダメか?」

「えつー!?

紫音は慌てる麻耶を見て、彼のサド心は大きく揺れ、彼女の頬にそつと手を伸ばし視線を逸らす事なく言つと麻耶の顔を耳まで真つ赤に染まつてゐる。

「な、な、何を言つてゐのよー? そ、そいやつて私をからかって何が楽しいのよー?」

「仕方ないだろ。俺はひねくれてるから好きな娘はからかいたくな るんだ」

麻耶は紫音から逃げ出そうとするが、まっすぐと自分の瞳を見つめる紫音から逃げる事はできなく、紫音は彼女との距離を縮めて行くと、

「……兄さん、そのへんにしなよ

紫音と麻耶の様子を見て久遠は呆れたよつた口調で紫音に声をかける。

「ん。そうだな。麻耶の慌てる姿が可愛くてからかいなくなつたんだ。謝る。それと呼び方だけど、久遠もいるし前田だと分かりづらいから名前で呼んで欲しいんだ。俺は麻耶のこと仲間だと思つてるから。ダメか?」

「……あんたね

紫音は麻耶の頭を優しく撫で、「冗談だと叫びつと麻耶は一瞬、呆気にとられたような表情をした後、麻耶の額にはほつきりとした青筋が浮かび出し、

(……逃げるか?)

紫音は戦略的撤退に移ろうとする。

「……あんたって人はもついいわ。呼び方だけど考えておくわ

「あ、ああ

麻耶は紫音をジト目で睨みつけると自分の席に戻つて行く。

「小恋ちゃん、冗談で良かつたね」

「わ、わたしは別に」

紫音と麻耶のやつとりを心配せつに小恋が見ていたため、西は小恋をからかうよひに「う」と小恋は否定するが、

「……兄さん、やつちやぎ」

「……紫音、やつすやぞ」

久遠とぴつたりと歯を合わせて紫音を非難する。

「気にするな。俺と麻耶との間じゃいつもの事だ」

しかし、紫音に反省した様子はなく、

「久遠、握り飯作ってきたから、始まる前に腹に入れとけ」

「兄さん、ありがと」

朝食を抜いていた久遠におにぎりを渡す。

「美しい兄弟愛だな。同志たちよーーー。」

「……杉並、普通に出でこよ。心臓に悪い」

紫音と久遠が緩い空気を出していると『杉並』は音もなく忍び寄り、声をかけると周りは驚きの声をあげるが、紫音は杉並の接近に気づいていたようでため息を吐くが、

「氣づいていたくせによへよこつ。それより同志紫音、同志桜内よ。
来週の新入生歓迎会のことと相談があるのでが？」

杉並に反省をする気はない、紫音と義之を悪だくみに巻き込むつむりでニヤリと笑う。

「杉並、悪いナゾ今回、紫音は渡せないわ」

「どういひことだ。雪村」

杉並の言葉に杏が割って入ると杉並は真面目な表情をして聞き返す。

「依頼でな。新歓で使う演劇部の衣装作りを手伝うことになつた。写真部のこともあるから、手伝えるとしたら当口だけだぞ。それでいいいか？」

「前口まで何もしないぞ。何もしないのもそれはそれで生徒会を攬乱できるだろ？」

「……そら。それならまだ計画を少し変更しないといけないな。それならこじかにいひして」

紫音も義之も本番しか手伝わないと言つと杉並は変更箇所が出てきたようでニヤリと笑う。

「何とかなりそうか？」

「当然である。詳細は後口云々る」

3人がニヤリと笑うとチャイムが鳴りだし、

「そろそろ。先生来るな。席につこうぜ」

「そうだね。でも、その前に。今年一年よろしくね」

涉が席に座るついで久遠は一年間よろしくと言つとそれぞれが思つた返事をする。

第3話（後書き）

どうも、作者です。

紫音、 麻耶で遊ぶ。 （爆笑）

この2人はこんな感じ、 麻耶は紫音にからかわれて顔を真っ赤にするのがお約束な作品です。

サドな紫音はどう行く？

第4話

(始業式の日くらい授業なくともいいよな)

紫音は午前中の授業が終了の鐘がなり、教師が教室を出て行くのを眺めながら弁当箱を取り出し、

「久遠、どこで食う?」

「今日は天気もいいし、屋上に行こうか」

「そうだな。天気も良いしな」

前の席に座っている久遠に声をかけると久遠は屋上に行こうと言いうふと2人が立ち上がる、

「さすがに屋上は寒くない? 紫音くん、久遠くん、私達と一緒に食べよ」

茜が手招きしながら2人を誘う。

「あれ、3人だけ、義之や涉は?」

「涉君は学食、義之は杉並君に連れてかれた」

久遠は手招きしている茜を見ると茜、杏、小恋の3人しかいなかっため、義之と涉がない事に首を傾げると小恋は苦笑いを浮かべて2人がいない理由を話す。

「……と並の事は義之は抜きだな」

「やうね」

紫音は小恋の言葉にため息を吐くと杏の口元は小さくゆるむ。

「仕方ないな。先に食つてくれ。俺は義之と杉並のパン買つてくれる」

紫音はもう一度、ため息を吐くと一人で学食に向かう。

⋮
⋮
⋮
⋮
⋮

(我ながら大量だな)

紫音は出遅れたにも関わらず、人気の総菜パンを手に教室に戻ると、

「紫音、遅いよ。私、お腹減ったよ」

紫音を待っていたようで、小恋はゆっくりとしている紫音を見て不満げな声をあげる。

「わざわざ待つてたのか？ 先に食つてないと言つただろ」

「小恋がどうしてもひいていたのよ。それで、紫音、戦利品は？」

杏が紫音の皿つておいたパンを見せるよ、と、

「スタート遅れた割にはなかなかのもんだら」

「わすがだね。こんど私もお願ひしようつかな？」

紫音は手にしたパンを誇らしげに見せ、齒は自分が行くつもりでノナップが優れているため紫音に向かって言つたが、

「依頼ない受けたけど、割に合わんだけ。それより早く食おう」

紫音は割にあわないからオススメはしないことにして、全員がそろったため、弁当を食べ始める。

「あつー？」

「小恋、どうかしたか？」

紫音が自分の弁当の卵焼きを箸でつかむと小恋が声をあげる。

「いや。紫音の作った卵焼き美味しいんだよなと思ってできれば食べたいなあと」

「箸つけちまつたし……仕方ないか。ほれ、口開けろ」

「えつー？ でも……」

小恋は少し恥ずかしそうに黙り、紫音は深くは考へる事なく、卵焼

きを小恋の口元に放り込むとその姿を見た、茜と杏は「アーン」と口を開けていた。

「他のおかずならまだあるだろ。食いたかつたら勝手に食え」

「小恋ちゃんは良くて私たちはダメなの?」

紫音は2人の様子にため息を吐くと茜は首を傾げ、上田づかいで紫音の顔を覗き込む。

(……畜生、かわいいじゃねえか)

紫音は若干負けた気がしながらも茜の口に肉団子を放り込み、

「杏、お前は何にする?」

杏に何にするかを聞くと、

「やうね。そこで皿を畳ませないよってしてる久遠が食べてる口ッケがいいわ」

「……杏、冗談は止めてよ」

杏は久遠をからかうように言い、久遠はため息を吐く。

「久遠、諦めろ」

「……まあ、諦めるしかないのはわかってるよ」

紫音は苦笑いを浮かべて久遠に言うと久遠は杏の口元に口ロッケを

運び、一口食べると、

「うわあ。久遠。私が食べたところの味を楽しんで食べてね」

「……それは変態だから」

杏は久遠に追い討ちをかけよつとするが、久遠は動搖する事なくロシケを口に運ぶ。

「でもでも、小恋ちゃんと紫音くんすく自然だつたよねえ」

「茜、何を言ひしるのよーっ！」

「紫音、幼なじみ萌え？」

茜は小恋をからかいつゝと小恋は全力で否定するが杏はくすりと笑うが、

「それは無い。だいたい幼なじみとくつくなんて、どつかのH口ゲージやないんだから、ありえないだろ。それに……」

「「「それに？」」「」

「幼なじみ萌えは男、女どちらかがダメダメだからこそ萌えるんだ……」

紫音には紫音のこだわりがあるようで熱く叫ぶとクラスの中から渴いた笑いが聞こえる。

「義之、杉並、お帰り」

「……もつダメだ。腹減つて死ぬ」

弁当を食べ終えてしばらくすると義之と杉並が教室に戻ってきたため、久遠が声をかけるが、義之は何も食べていないよう机の上に突っ伏す。

「あ、なぜかこんなところにお皿の残りのパンと牛乳が、でも、私はお腹いっぱい、さて、どうしたものか？」

そんな義之の様子に杏はわざとらしく総菜パンと牛乳を取り出す。

「……ねえ。紫音、あのパンって」

「俺が渡すより杏に任せた方が面白そつだから任せた」

「……兄さん」

小恋は杏が持っているパンに心当たりがあり、紫音に聞くと紫音の答えに久遠は呆れ顔をしてため息を吐く。

「俺を見ぐびるなよ。雪村杏、俺様は幼少期から帝王学を仕込まれいはずれは日本を背負つて立つ男と言われた身、それをパンの一つや二つで挑発しようとは片腹痛いわ。はつはつはつはつ。犬とお呼び下さい……」

「犬」

「ワンツッ」

義之は杏の言葉を最初は鼻で笑うが食欲に負けて犬に成り下がる。

「お前には、プライドじゃないんか？」

「つるせえつ！… プライドじや、腹は膨れんねえんだよ。資本主義なめんなつ」

杏は義之の様子にため息を吐くが義之はプライドよりは飯が大事だと言い切る。

「まあ、いいわ……お食べ」

「いいんか？」

「うそ、もともと、紫音のだしね」

「やうなのか？」

杏は義之の様子に呆れたようにため息を吐くと義之にパンを渡す。

「義之が杉並と出て行つたつて聞いたから、念のために聞くつといたんだ。ほらつ、杉並。お前のぶん」

「同志紫音、恩にきる」

「サンキュー、紫音」

紫音は買つておいたパンを取り出すと義之と杉並は2人でパンをわけ、食べ始める。

第5話

『今日のLHRの議題は、クラス委員2人の選出と来週末にある新歓の説明だ。まず、クラス委員から立候補無いか?』

担任はやる気がなさそうに立候補を募るがそんな物好きがいるわけがない。

『決まらないな。それなら、推薦はどうだ?』

『沢井さんは?』

『去年もやつてたし適任だ?』

『沢井、どうだ?』

「わかりました」

担任は早く生徒達に任せて楽をしたいよつて直ぐに推薦に変えると麻耶が推薦され、麻耶は頷く。

『もう1人は男子から選んでくれ。誰か、推薦無いか?』

『久遠君は?』

『確かに』

『前田弟どうだ?』

久遠が推薦され、担任は久遠に聞くが、

「すいません。今年は、剣道部の方があるので辞退したいと思います。代わりに兄さんを推薦したいと思います」

(……久遠、なぜ、俺を推薦する)

久遠は苦笑いを浮かべて辞退すると変わりに紫音を推薦し、その言葉を聞いたクラスメート達はざわめきたり、

(……そんなに俺じゃ不満か?)

紫音はその反応に少しイラつとする。

『前田兄どうだ?』

(杉並が動きやすいように表からフォローできるか? クラス委員として風紀委員、中央委員の内部調査、搅乱……まあ、やりようによつては面白いな)

担任は紫音の様子を気にする事なく聞くと紫音は少し考えると、

「俺は問題ありませんよ。クラスから反対なければですけど」

何かを企んでいるように笑うがクラスメート達はクラス委員など面倒な仕事はやりたくないため、紫音の笑みに気づかないふりをし、紫音と麻耶がクラス委員に決定する。

『委員長が沢井、副委員長が前田兄で決まりだな。2人ともあとを頼む』

「わかりました

「はい

担任は紫音と麻耶に配布プリントを渡し教室を出て行くと、

「それじゃあ、麻耶、任せた」

「……それでは新歓の説明をします。基本は各部活の勧誘と部費集めだから、帰宅部は自由ね。有志で出し物も出来るから希望者は生徒会の方に手続きに行くこと。後は……これね？」

紫音は麻耶に司会を任せ板書を始めると麻耶はため息を吐いた後、テキパキとHRを進めて行くが最後のプリントを見て麻耶は呆れたような表情をする。

「どうした？　

「……これよ

「何々？……』第1回生徒会、手芸部共同主催プリンス&プリンセスコンテスト略して『プリコン』』

紫音は麻耶の様子に後ろからプリントを覗き込むと新入生歓迎会で行われるイベントがかかれており、

「……頭、痛くなってきたわ

(流石、涼芽さん。よく、音姫さんとまゆあさんを説得したな)

麻耶はこの手のイベントに不快感があるようで頭を押さえないと紫音は音姫や『高坂 まゆき』を押さえ込んでこのイベントを強行した現生徒会長『磯鷺 涼芽』の顔を思い浮かべて苦笑いを浮かべると、

「まあ、さつさと決めようぜ」

「私はバス。前田、あんたがやつて」

「へへへ」

麻耶は乗り気にはなれないようで紫音に任せると言つと紫音に司会を任せ、紫音はそんな彼女の様子に苦笑いを浮かべ、

「代表者は男女各二名ずつ、優勝クラスには文化祭の予算アップ。代表者が無かつたクラスは予算半額。代表者は今日の放課後、採寸のため男子は理科室、女子は被服室に集合。立候補及び推薦あるか？」

「推薦だ。クラスの代表なのだろう？　なら一組はクラス委員の委員長と同志紫音で決まりであろう」

プリントを読み上げると杉並がスッと手を上げ、何かを企んでいるのかニヤリと笑い紫音と麻耶を推薦する。

「ちょっと、杉並。あんたは何を言つてゐるのよ。前田、あんたも何か言つて！！」

「俺は別にいいぞ。麻耶は美人だし、充分に優勝狙えるだろ。反対意見はあるか？……ないな。じゃあ、1組は俺と麻耶な。他に推

薦、立候補あるか？」「

麻耶は杉並の意見は却下だと良い、紫音に反対意見を求めるが紫音は構わないと言つと進めて行く。

「男子は久遠で良いんじやない」

「えつー!?俺じゃねえの」

杏が久遠を推薦すると渉が自分が推薦されない事に驚きの声を上げる。

「ふざけた事を言つた。お前がでたらクラスの恥でしかない」

「何だよ。それ」

紫音は渉の言葉をバツサリと切ると渉は不満げな声をあげるが、

「さんせーです。渉君は出ない方が良いと思います」

『板橋が出るなんになつたりつちのクラスのレベルが低く見られるだろ。久遠が適任だ』

茜は手を上げて、渉が代表になるのを否定するとクラスメート達は久遠が代表にふさわしいと言つ。

「じゃあ、もう1人の代表は杏だな」

「ふふふ。光栄ね」

女子の代表がなかなか決まりず、推薦された杏、茜、小恋のなかか

「いや、多數決をとると杏が代表に決まる。」

「代表者は前田兄弟と雪村さん。そして、私ね。前田の方から何かある？ なければ、あとは時間まで自由よ。」

「じゃあ一つだけ、今回の投票でクラスにロリコンが多いと言いつて実が発覚した訳だが犯罪を起しえないよ！」

麻耶は納得いかなさそつた表情をしながらも、HRをしめる。

第6話

「……ちょっと良いかしら？」

「説明しただる。麻耶は美人だから充分いける。ピリピリするなよ」

「そうだね。沢井さんは美人だと思つよ」

額に青筋を浮かべた麻耶が紫音の胸倉をつかむ勢いで聞くが紫音はそれを交わし、無駄なくらいの優しい笑みを浮かべると久遠も麻耶を誉め、麻耶の顔は真っ赤に染まって行くが、

「前田君まで、ここつと一緒で私をからかうの？」

「そんなつもりはないよ」

麻耶はからかわれていてと思つていても紫音だけではなく久遠も睨みつける。

「麻耶、俺も久遠も嘘を吐いてないから、証明してやる。ヤレヒに座れ」

「……何をする気よ？」

「ちょっとな」

疑つている麻耶を椅子に座らせると紫音はカバンからメイク道具を取り出し、

「何で、マイク道具なんて持つてるの？」

「仕事道具だ」

紫音のカバンから本来、男が持っているはずのないものが出てきたため、茜は苦笑いを浮かべるが紫音は気にする事なく麻耶にマイクを初めていく。

「相変わらずの腕ね。また、演劇部の公演の時にお願ひできるかしら？」

「ああ。必要な時は事前に言つてくれ……誰か、鏡貸してくれ」

「これで良い?」

紫音は麻耶のマイクを終えると小恋から鏡を借りて麻耶に渡す。

「……つか?」

「嘘は言つて無かつただろ。杏、次はお前だ」

麻耶は鏡を覗いて驚きの声をあげる隣で紫音は杏を呼ぶ。

「わかつたわ。これでわたしはまな板の上の鯉、紫音に向をされようとも逆らえないわ。好きなよつこして」

「……いや、杏に向かしようとすると後が怖いからやめとく」

杏は紫音を挑発するよつこ言い、紫音はため息を吐いた後、杏のメイクに取りかかるが、

「……久遠、小悪魔系とかわいい系どっちが似合つと思つへ。」

「どっちも似合つと思つよ。杏は可愛いくから」

紫音は杏のマイクに悩み久遠に意見を求めるが参考にはならない。

「両方試してクラスの反応を見てはどつだ?」

「マイクを落とす時間もあるし、どっかしか出来ないなあ……後の事を考えると他に情報渡したくないし」

「……確かに」

杉並が紫音に両方試すように言つたが、紫音には考えがあるようで時間がないと言つと杉並は紫音の考えに気づいたよで考え込む。

「紫音、舞台に立つんだから。かわいい系がいいんじゃない?」

「……そうだな。杏、問題無いか?」

「わたしは紫音に任せせるわ」

小恋の言葉に周りからも反対意見もなく、紫音は杏から承諾を得て仕上げに入る。

「杉並、何を企んでるんだ?」

「たいした事では無い。せつかくだからクイズ大会でもしようかな?
? と思つてな」

杉並が何も言わない事を不信に思つたようで渉が声をかけると杉並はニヤリと笑う。

「優勝候補は白河ななかのいる付属3・2、まゆきさん、音姫さんのいる本校2・3、由夢ちゃんのいる付属2・1ってどこか？」

「生徒会長、磯鷺涼芽を有する本校3・4もなかなかの人気だ」

「現在のうちの状況は？」

「さすがにまだわからないって」

杉並の『クイズ大会』の一言に紫音、義之は杉並がやろうとしたクイズ大会の概要をはじき出すと久遠は苦笑いを浮かべるが、

「非公式新聞部の力を侮つて貰つと困るな。同志久遠よ。すでに200人近い同志達がこの企画に参加している……状況だが先に上げたクラスはやはり人気がある。今のところ、1番人気は付属3・2だ。流石に各クラスの人気がある生徒がでるため、同志久遠の人気が高いとはいえる余りうちの人気は高くない」

杉並は久遠の心配を鼻で笑う。

『優勝は難しいか？』

『いや、まだ付属の新入生の票がどう動くかわからないからそこを押さえれば、このメンバーなら総取りもいけるだろ』

『それが難しいんじゃないか？』

杉並の言葉にクラスメート達にも火がついたようで細かな作戦が飛び交うなか、

「……杉並、悪いけどやつて貰いたい事ができた」

「何をしたらいい?」

紫音は何かを考え付いたようで杉並を呼ぶ。

「付属新入生の票は正攻法で集める。何人が手伝って欲しいんだけど、クレープ屋をやるのと思つ。それで演劇部の公演を見ててくれた人に広告用としてクッキー等を配り公演を見た新入生がこちらに流れるようにする。剣道部の部活紹介、演劇部の公演で久遠、杏の顔が知れる訳だから2人に広告塔になつて貰えればさらに人が集まる。このクレープ屋はWプリコンの票集めのものだから赤字さえ出なければ、新入生には値下げしたって構わない」

「……なら俺は客を集めればいいのだな」

紫音の作戦に杉並はすぐに利益計算をしたのか悪くないと笑つ表情をする。

「話が早くて助かる。後、俺は新歓の間は店を離れられないから、すまないがそっちの方が手伝えない」

「仕方ないだろ?」

紫音と杉並は顔を合わせてニヤリと笑う。

「よし、完成。鏡ドンやつた?」

「ええ」とあるのみ

杏のメイクが終わると麻耶の時と同様に『優勝いけるよ』とか『持つて帰りたい』と言つた声が聞こえ、

「杏、感想は?」

「わづね」

紫音が杏に感想を求めるとき杏は獲物を久遠に決めたようだ、

「久遠、どう、わたしかわいいかな?」

「か、可愛いよ。すうぐ似合つてゐる」

「そり……」

久遠の顔を上目使いで覗き込み、久遠は杏の顔を直視できないのか顔を真つ赤にして杏から目を逸らすと杏も照れたのか黙ってしまう。

「2人とも元がいいから楽だつたな。2人とも時間無いしメイク落とすぞ。麻耶」

「う、うん」

紫音は久遠と杏の様子に苦笑いを浮かべると「麻耶を呼び、彼女のメイクを落とし始める。

第6話（後書き）

どうも、作者です。

紫音の企みは何を意味しているんでしょうか？

そして、無駄なぐらいの万能スキル取得な紫音。その無駄な才能は何に使われるのでしょうか？（爆笑）

第7話

(……どうするかな?)

紫音は生徒会室の真ん中で正座をさせられ、音姫にお説教を受けていた。

(……一度、状況を整理しよう)

紫音はこの状況になつた理由を整理しようとある。

事の始まりは10分前、

「失礼します。新歓で有志でクレープ屋をやりたいので手続きをしたいのですが」

紫音はHRで話をしていたクレープ屋出店の手続きをして生徒会室を訪れ、

(ここまでは順調だったよな)

問題なく手続きを終え帰ろうとした時、

「どうしたのかにゃ　こんな所にいるなんて」

ラスボス『高坂 まゆき』が現れた。

「有志でやるクレープ屋の手続きをしていただきだけです」

「ホント」

紫音はまゆきの登場に事実だけ告げて帰りうつするが、まゆきは紫音を躊躇つていたよつて紫音の顔を覗き込む。

(確か、ソリで、まゆきさんの耳をパクッと)

紫音はまゆきがあまりに無防備に顔を近づけてきたのでまゆきをからかうために彼女の耳を噛み、

意表をつかれたまゆきは顔を真っ赤にして固まつ、

(……こじで勝つた。と思つたんだけどな。最近はラスボスの後にも敵はいるからな。まさか、音姫さんがいるとは思つてなかつた)

紫音が勝利を確信した時、廊下からまがまがしいオーラを感じ廊下を紫音は恐る恐る覗くと、般若（音姫）が立つており、

「しー君、エッチなのはダメだからねつていつも言つてるよね」

「オトメサンゴニーハフカイワケガアリマシテ」

「ここからそこそこ正座なさい。」

笑顔で紫音に正座をしろと床を指差し、紫音は逃げ出せうつするが音姫は紫音を怒鳴りつけ、紫音は音姫の勢いに負ける。

(……まあ、そろそろ退散して良いよな。これ以上は足もキツいし、何より今日は卵のタイムサービス。この後にはクレープ屋のメニュー決めと試食会がある。だから絶対にタイムサービスは外せない。どうにか逃げ出したいが援護は無い。さて、どうする？……あの

手でいくか？）

紫音は状況の確認を行うと逃げる計画を立て始め、何かを思いついたようで邪悪な笑みを浮かべると、

「だいたい、まゆきさんだつて悪いじゃないですか。俺だつて年頃の男の子ですよ。まゆきさんや音姫さんみたいな魅力的な女性が無防備に顔近づけられたらいろいろとしてみたいじゃないですか？」

「「えつー？」」

紫音は優しげな笑みを浮かべると2人は紫音のいきなりの言葉に驚き顔が赤く染まって行く。

（……今のうちだな）

紫音は2人が驚いている間にそそくせと立ち上ると全力で生徒会室から出て行き、

「しー君ー!?」

「紫音くんー?」

（どうやら我に返ったようだな）

紫音が生徒会室を出て階段を降りようとした時、2人の声が響くが、紫音は振り返る事なく、全力で学校から逃げ出す。

第8話

(……明日、2人に謝らないとな)

紫音は商店街に着くと音姫とまゆきに謝らないといけないと考えながら店を覗いていると、

『ねえ、一緒に遊ぼーよ』

『カラオケ行こう。白河さんの歌聞かせてよ』

「『めんなさい。ななか、用事があるんです』

『ガタガタ言わずに来いよーー.』

本校の男子生徒3人が付属の女子生徒をナンパしているのが見え、男子生徒は女子生徒の腕をつかみ無理やり連れて行こうとしている。

(……あれは確か、『白河　ななか』だよな。ほっとく訳にはいかないか)

紫音は女子生徒が学園のアイドルとまで言われている『白河　ななか』だと気づき、

「先輩方、無理やりつてよくないんじやない?」

ななかの腕をつかんでいる男子生徒の腕をつかむと、

『邪魔するなよ。痛い目にあいたいのか?』

男子生徒達は1人で向かつてきた紫音を見て鼻で笑う。

「三下のセリフ吐いて無いでやるならやりますけどどうします?」

『「コイツ馬鹿じゃないか? 3対1で勝てる訳無いのに、カッコつけて出てこなければケガしないですんだのによ』

「そうですね。俺、相手に3対1で勝てると思った先輩達がね」

男子生徒達は紫音を見下しながら言つが紫音は不敵な笑みを浮かべると懐からなぜか花火を取り出し、

「生きてる事を後悔させてあげますよ」

笑顔で男子生徒を撃ち抜いて行く。

『お、覚えてるよ』

「最後まで三下のセリフだつたな」

男子生徒達は紫音に撃退されて捨て台詞を吐いて逃げて行く。

「ありがとう。助かったよ。断つてもしつこくて困つてたんだよ。わたし、白河なかつて言います。あなたは?」

「名乗るほどの者では無いです」

ななこは紫音に名前を聞くが紫音は名乗らずに買い物に戻るつするが、

「どうして名前教えてくれないの？」

ななかは不満そうに頬を膨らませる。

「俺、見た目通り貧弱だから白河ななかのファンクラブに追いかけられたら死んじゃうんで」

「紫音くんも大変だね。そうだ 助けて貰つたお礼に桜公園でクレープでも食べない？」

紫音は冗談を言つたとななかは紫音を知つていたようでお礼をしたいと言つと、

「……なぜ、俺の名前を知つているのですか？ 白河さん」

紫音はななかが自分の名前を知つている理由を聞く。

「ななか。白河じゃなくて、な・な・か」

「白河さん、人の質問には答えましちゃうね」

「紫音くんがななかって言つてくれたら教えてあげる」

「……ならいいや」

紫音はななかのペースに引きずられる事を避けたいと思い買い物に戻りとするとななかに腕を捕まれる。

「どうして帰らうとするの？ こんなに可愛い子が誘つてるのに」

「卵のタイムサービスがあるから。せっかく、お礼なら一緒にタイムサービスで卵買つてくれださー」

ななかは不満そうに言つが紫音はタイムサービスが重要なようである。

「卵？ 紫音くんって噂通りの人何だね」

「……噂？」

「聞きたい？」

ななかは紫音が首を傾げるのを見て「ヤーヤ」と笑うが、

「遠慮する。どうせ変な噂だらうし。それじゃあ、時間だから」

「待つてよ。わたしも行くよ」

紫音は興味がないと歩き出すとななかは紫音の後を付いてくる。

「お礼なんていいのに。それより、いつになつたらななかつて呼んでくれるの？」

「白河さん、助かった。これお礼

買い物を終えると紫音は買い物に付き合つてくれたお礼にとなかに缶ジユースを渡す。

「さすがに今日、会つてきなり呼び捨てはどうかなと」

「わたしは氣にしないけど。それにわたしたちもつ友達でしょ」

ななかは笑顔で紫音に言い、紫音の手を握る。

「……わかったよ。これからよろしくな。ななか」

紫音は苦笑いを浮かべた後、ななかの言葉に折れるとななかを彼女の家まで送り届ける。

第9話

クレープの試食会を終えて後片付けをしてると紫音の携帯電話がなる。

「ん？ かあさん、どうかした？」

「紫音くん元気にしてる？」

「まあ、俺も久遠も病気もしてないよ。それで、何かあった？」

母親からの突然の電話に紫音は用件を聞くと、

「明日、舞ちゃんから詳しい話があると思ひけど、明日から1人、家に居候させて欲しいの。久遠くんにも伝えといて」

「……切れた。かあさんは相変わらずか」

母親は自分の言いたい事だけ言つと電話を切る。

「誰から？」

「かあさんから、明日から1人居候させて欲しいんだと。詳しくは、明日、舞佳さんから話があるって」

紫音は相変わらずの母親の行動に苦笑いを浮かべていると久遠が紫音に声をかけ、紫音は母親からの電話の内容を伝える。

「水越先生から……どうしてかな？」

「考へても仕方ないし、客間の掃除でもするか」

「そうだね」

2人は状況がつかめないが客間を掃除する。

翌日の昼休みになると紫音と久遠を呼ぶ校内放送がかかり、2人以外にも義之と『天枷 美夏』と言う生徒が保健室に呼び出される。

「「失礼します」」

「あら、いらっしゃい。ちょっとそこへ座つて。わざわざ来て貢つて悪いわね」

紫音と久遠が保健室のドアを開けると風見学園保険教諭であり、天枷研究所の職員である『水越 舞佳』が2人を出迎え、舞佳の後ろには義之と『天枷 美夏』だと思われる女子生徒が不機嫌そうな表情で椅子に座っている。

「水越先生、かあさんから1人、居候させてくれと言わたんですがひょっとしてこの子ですか？」

「ええ、2人は前田教授からどこまで聞いてるの？」

久遠は美夏の事を舞佳に聞くと舞佳は苦笑いを浮かべながら、聞き返し、

「1人、居候させる。詳しくは舞佳さんから聞いてとしか

「……最初から説明するわ。桜内君は知っているけど、この娘、天枷美夏は口ボットなのね。最新鋭……とは言つてもちょっと古い技術何だけど……まあなんて言つか、少し特殊な作りになつていて」

紫音は母親から言われた事をそのまま話し、舞佳は解答が予想外だつたようで頭を押さえたため息を吐く。

「口ボット？」

「特殊ですか？」

紫音と久遠は目の前にいる美夏が口ボットには見えず怪訝な表情をするが、

「見ての通り普通の人間となんら変わらない感情や自分の意志を持つているの。まるで人間と見分けがつかないくらいのね」

舞佳は2人の反応は当然だといたげに苦笑いを浮かべる。

「本当に口ボット何ですか？」

「貴様つ、美夏を愚弄するつもりか！！」

「いや、どうみても人間にしか見えないし」

「だつたら証拠を見せてやるついぢやないか。このロケットパンチをくらえ！…」

義之も美夏が口ボットと言う事が信じられないようで舞佳に聞くと美夏は右手を前に出し言つが、

「付いてないわよ」

当然、そんな物騒なものは取り付けられていない。

「「なぜ付けん！！」

「必要無いでしょ」

美夏の言葉に紫音も期待していたようでロケットパンチがないと言う事実に美夏と声を合わせて言つが舞佳は呆れたようなため息を吐く。

「必要、不必要の問題じゃないです！！ ロケットパンチとドリルは男の子のロマンです」

「兄さん、ちょっと黙つて」

「……はい」

しかし、紫音は舞佳の言葉に納得がいかないと笑顔の久遠におかしな事を言つなと言われ、借りてきた猫のように大人しくなる。だから凍結されてた

「凍結つてどういう事ですか？」

舞佳は紫音と久遠の様子に苦笑いを浮かべると説明に戻り、久遠は

聞き慣れない言葉に首を傾げると、

「昨日の昼休みに杉並に連れてかれた洞窟に天枷が眠つてて起こしちゃつた」

義之は氣まずそつて言い、

「起こしちゃつたって」

「終わった事は仕方ないだろ。それに面白がりやないか」

久遠はため息を吐くが紫音は楽しそうに言つ。

「続けるわね。知ってるでしょ。ロボットにまつわるこんな事件のこと」

「まあ。授業で習いますし」

「俺から見ると人間の方が問題があるような事件ばかりですけど」

舞佳は真剣な表情をして言うと久遠と義之は頷き、

「そうだな。みんながそういう考え方ならいいけどそういうかないのが現実だろ」

紫音は舞佳が何を危惧しているかすでに理解しているようで冷静な声で言つ。

「そういう事。そんな中、天枷の存在が知られたりしてしまったら

「スクランプだな」

舞佳は紫音の理解力にため息を吐くと紫音は単刀直入で言い、

「兄さん！！」

言葉を選ばない紫音に久遠が怒鳴りつけるが、

「久遠、怒るなよ。舞佳さん、俺達はバレないよう美夏をサポートすればいいんですね？」

紫音はやるべき事を理解しているため、舞佳に確認する。

「断るっ！！ 美夏は優秀だしシステムも安定してる。サポートなど必要無い！！」

「耳から煙出してたんじゃ説得力無いわね。ほら、これで回路冷やしなさい。フォローする人間は必要よ。これは研究所の総意と受け取って貰つても構わないわ」

しかし、美夏本人が紫音達のサポートは必要ないと叫ぶが熱くなりすぎているようで耳から煙りが上がり、舞佳はため息を吐きながら、美夏に冷却シートを渡し言つ。

「俺と兄さんは美夏ちゃんを家で預かればいい訳ですね」

「そう言う事ね。天枷は前田君達のいっこで家庭の事情で預かる事になつたと言う事になつてるわ。お願いできるかしら？」

久遠は母親と舞佳の言葉が繋がったようで舞佳に確認すると舞佳は

頷く。

「（）まで知つたら断る訳にいかないでしょ。美夏、俺は紫音でこ
つちが久遠だ。これから家族になる訳だから遠慮なく、『お兄ちゃん』と呼んでくれ！！」

「誰が呼ぶか！！ それと水越先生の指示には従うが美夏は人間を
信用するつもりは無い。だから貴様等は余計な事はするな。美夏が
言いたいのはそれだけだ！！」

紫音は美夏に『お兄ちゃん』と呼んでくれと言つが、当然、美夏には却下され、美夏は納得がいかないよつて不機嫌そうに保健室を出て行こうとすると、

「ちょっと待つて。これ家の鍵ね。それと人間全部を信用して何て
言わないから人間全部じゃ無く個人で見て欲しい。義之も兄さんも
いい奴だから信じれる人間だつているはずだから」

久遠が美夏の手を掴み、美夏に家の鍵を手渡すが、

「人間何て信じられるか！－」

美夏は久遠の手をほどき出て行つてしまふ。

「やれやれね。まあ、ずっと天枷の側で見てるつて訳じゃなく、た
まに気にかけて欲しいってだけなのよ。あの子、基本的に一人ぼつ
ちだからね」

「俺にも責任ありますし、出来る限り協力しますよ」

「ありがとう。できることなら仲良くしてくれると嬉しいんだけど、
ちょっといろいろあつてね。今は人間が嫌いになつてるのであの子
ほんとは素直ないい子だから」

舞佳は美夏の態度に苦笑いを浮かべながらも紫音、久遠、義之に頭
を下げ、3人は頷く。

第9話（後書き）

いつも、作者です。

まさかの美夏、義妹化（爆笑）

紫音の『お兄ちゃん』と呼んでくれや『ロケットパンチ』とドリルは
男の子のロマン』は好きな言葉に入ります。（爆笑）

第10話

(美夏はまだいるかな?)

紫音は美夏を家まで案内しようと彼女の教室の付属2年1組を覗くと、

「あれ? 紫音さん」

「紫音先輩どうしたんですか?」

由夢と由夢の友人の『綾瀬 遥』が紫音を見つけて近づいてくると、

「ちょっと用事があつてな…… いないな。由夢ちゃん、わんこ、美夏はもう帰ったか?」

紫音は教室を見渡すが美夏は見つからず、2人に美夏の事を聞くと、

「ミナツ? 天枷ですか? 鞄はあるし、もつゞいたら帰つてくると思いますけど..... どうしたんですか?」

由夢は今日、転校してきた美夏を紫音と久遠が預かる事になつた事を知らないため、首を傾げる。

「実は一日惚れしたから『テート』に誘つて押し倒そうと思つてな。今はアタック中だ」

「紫音先輩はみなっちゃんみたいな子がタイプ何ですね」

「遙、紫音さんの冗談ですから騙され無いでください。で、ホントの所はどうしたんですか？」

紫音は冗談を言つと遙は驚くが、由夢はジト目で紫音を見た後、ため息を吐きながら紫音に聞くと、

「嘘なんですか？　ひどいですよ」

「悪かつた。悪かつた」

遙は紫音の嘘に頬を膨らませると紫音は彼女の頭をポンポンと優しく叩き、

「ヒントをやる。うちの両親が再婚する前の久遠の名^{メイ}字は？」

紫音は苦笑いを浮かべてヒントを出す。

「由夢ちゃん、何だつけ？」

「えーと、確か、おばさんは…………天枷？　あれ？」

「久遠のことこのなんだよ。それで家で預かる事になったから迷子になつても困るし、一緒に帰るつと思つて」

由夢が首を傾げる様子に紫音はくすりと笑い、美夏を迎えてきた理由を話す。

「みなづちやんといふこと何だ。あれつ？　若い男女が同じ家に？」

「回棲！？」

「……違つからな。変な事を考えるな」

遙は「れしかないと言つ表情をすると紫音がため息を吐いた時、

「貴様、何をしにきた？」

美夏が教室に戻ってきて、紫音を睨みつける。

「迷子になると困るから迎えにきたんだ。美夏、もつ帰れるか？」

「必要無い！！ 美夏は一人で帰る。由夢、遙、またな」

「天枷さん、私も帰りますんで一緒に帰りましょう。遙、紫音さん、
そよづなら

紫音は美夏と一緒に帰ろつと言つが、美夏はカバンを持つと一人で
教室を出て行き、由夢が慌てて美夏の後を追いかける。

「2人とも、バイバイ！」

「由夢ちゃん、義之には言つてあるけど美夏の歓迎会するから、後
で家に来て」

「わかりました」

紫音は美夏の態度に苦笑いを浮かべるが、由夢に美夏の歓迎会をする事を告げ、

「聞いてたと思つけど、歓迎会に参加するか？」

「ハ～イ。参加しま～す タクちゅんも一緒にい～ですか？」

遙にも確認すると遙は頷き、自分のことである『天海 タクト』も誘つて良いかを紫音に確認する。

「久遠が誘つているはずだし、大丈夫だ」

「わっかりました それじゃあ、ボク、部活に行きますね」

「おひ。頑張れよ」

「ハ～イ」

紫音は遙と別れると、

(……後は涉と小恋だな。アイツら、軽音部だったな。音楽室でいいのか?)

涉と小恋にも参加確認をするために音楽室に向かい歩き始める。

第1-1話

音楽室前廊下

(きれいな歌声が聞こえるな。誰が歌っているんだ？)

紫音が小恋と涉の予定を聞くために音楽室に向かうと誰かが歌つているよほど綺麗な歌声が聞こえ、

(ななかだな？ すこしのまま聞いているのもいいかな？)

紫音が音楽室を覗き込むとななかが歌つており、紫音は少し聞き耳を立ててみると、

「紫音くん何をしてるの？」

「ななかの歌がつまなくてききぼれてた」

ななかが紫音に気づき声をかけてきて、紫音は苦笑顔を浮かべながらななかを警める。

「本当？」

「若干悔しいが本當だ。」

「あつがとつ。握手、握手。」

ななかは紫音に警められた事がよほど嬉しそうで紫音の手を取りはしゃいでおり、

(そんなに嬉しいか?)

紫音はそんななかの様子に苦笑いを浮かべてこると音楽室のドアが開き、

「あれ、紫音?」

「2人して、何しているの?..」

小恋と涉が音楽室に入ってきた、普段、音楽室に顔を出さない紫音がいる事に首を傾げる。

「ななかの歌に誘われてふりふりと戻りいたら」こんな感じで

「やうなんだ。ななかの歌キレイだからね。」

「……あんまり何でも信じるなよ。幼馴染」

紫音は冗談交じりで言つと小恋は紫音の言葉を信じ、紫音は純粋に紫音の言葉を信じる小恋の姿にため息を吐く。

「あれ? やういえば小恋とななかは仲いいのか?」

「やうだよ。お友達だよ」

「表面上はね」

紫音は小恋とななかの関係を聞くと小恋は笑顔で頷くがななかは小恋をからかいに走るが、

「なんだ。俺と渉の関係と一緒にか」

「ひどい。わたしどのことは遊びだったのね」

「キモい。間違った。俺と渉の関係は主人と犬だ」

紫音がさらにボケをかぶせ、渉がそのボケにのつかる。

「ど」まで落とすんだ

「そうだな。渉より犬の方が役に立つ。渉と犬を比べるなんて犬に失礼だな」

「ガツガーン」

紫音が真面目な表情で言つと渉がは音楽室の隅でいじけだし、

「渉君ー?」

「紫音くん、板橋君あのままでいいの?」

「気にするな。それより、二人はほんとに仲いいみたいだな。」

小恋は渉の様子に驚きの声を上げ、ななかは苦笑いを浮かべるが紫音は渉を気にする事なく、小恋とななかの関係を聞くと、

「そうだよ。小恋ラブー」

「ちょっと、ななかー」

ななかは小恋に抱きつき紫音は2人の様子に苦笑いを浮かべた時、「なあ紫音、ああ言いつのを見るとなんかイケない気分になつてくるな？」

「言つてろ」

涉が復活しきだらない事を言つたため紫音はため息を吐く。

「それより、ほんとに紫音はどうしたんだ？」

「今日から、従妹を預かることになつて歓迎会をしようと思つて小恋とななかを誘いにきたんだ」

「俺は？」

「犬に食わせる餌はないからなあ」

「まだ、引っ張るんかい！！」

涉は紫音が音楽室に来た理由を聞くと紫音は先ほどのボケを引っ張り、涉が声をあげると、

「冗談だ。それより3人ともどつする？」

紫音は苦笑いを浮かべると3人に予定を確認すると3人は全員参加すると言つため、

「なら、あとで家に来てくれ」

「紫音はこれからどうするの？」

「紫音は先に家に戻るわ」とすると、小恋が紫音に聞く。

「買い物して食い物作る。結構、多人数だから急がないといけないしな」

「なら、わたしも手伝おつか？」

「ななみは部活だわ。気にしなくていいだ

紫音は準備をしたて帰ると言いつとななみは手伝いに手をあげてくれるが紫音は部活の邪魔はできないこと断るが、

「わたし、軽音部じゃないし、大丈夫。とうこうひで紫音くん帰
えろ」「

「それなら、手伝つてもうかな。じゃあ、行くか

「うん、小恋、板橋君、また、あとでね

ななみは紫音の手伝つとすると小恋と涉に向かって言つて、

「うそ、ななみ、準備よしへね

「じゃあ、後でな

小恋と涉は部活をはじめ、紫音とななみは商店街に向かう。

第1-2話

「ななか、助かった。ありがとな。またあとでな」

「料理も手伝うよ」

紫音とななかは買い物を終えて、前田家の前に着くと紫音はななかに一度、帰るよつに言つが、ななかは帰らずに料理を手伝つと言つた。

「……できるのか?」

「紫音くん、ひどいな。これでも料理は得意なんだよ」

紫音はななかが料理ができるか疑つとななかは頬を膨らませるが、

「意外だ」

「ガーン」

「悪かった。悪かった」

紫音はななかが料理ができると言つ事を意外だと言つ切るとななかはノリが良いようでわざとらしく落ち込み、紫音はそんなんなかの様子に苦笑いを浮かべるとななかの頭を優しく撫でると、

(紫音くんつてこいついう事、自然にするんだなあ。これは確かに人気あるわけだよ)

ななかは紫音が女の子から人氣がある事を知つていてるようで苦笑い

を浮かべる。

「手伝つてもらえるのはありがたいけど、制服が汚れるだろ。うちにはエプロンなんてものはないぞ」

「明日、休みだし大丈夫だよ。何だったら、紫音くんの服を貸してもらつてもいいわけだし」

「確かにな。人数も多いし、わかつたよ。ご協力お願ひします」

「うん」

紫音はななかの制服が汚れる事を気にするがななかは気にしないで良いと言つと紫音は改めてななかに頭を下げて2人で家中に入る。

「おじやまします」

「ただいま。美夏いるか?」

「お帰りなさい。紫音さんと……」

紫音とななかが家中に入ると由夢が着ていたようで2人を出迎えるが、由夢はななかと面識がないため、首を傾げると、

「白河ななかです。朝倉由夢ちゃん」

「よろしくお願いします。白河先輩」

ななかは自分から由夢に名乗り、2人は頭を下げる。

「由夢ちゃん、美夏は？」

「部屋で着替えてますよ。客間で良かったんですね？」

「ありがとうございました。Jリーチは大丈夫だから。由夢ちゃんも着替えてきてくれ」

紫音は部屋を見渡すが美夏の姿が見つからないため、由夢に美夏の事を聞くと由夢は美夏を客室に通しており、紫音は由夢にお礼を言つと制服のままの由夢に着替えてくるように勧める。

「わかりました。それでは後で兄さんとお姉ちゃんを連れてきますね」

「ああ。ん？ 待つて。由夢ちゃん何か食べたいものつてある？ 希望があるなら言つて」

「そうですね。おかずではないんですけど。Jの間、作ってくれたマフィンが食べたいです」

「おつか~。美味しいのを作るよ」

「楽しみにします」

紫音は由夢のリクエストに頷く由夢は嬉しそうに笑った後、前田家を出て行き、

「ななか、JJち来て、服貸すから」

「うん」

紫音はななかを自室に案内する。

「きれいに片付いてるね。わこと……」

「……何がしたいんだ?」

「男の子の部屋に入るの初めてだからエッチな本でもないか?と」

ななかは紫音お部屋に入るなりベッドの下を物色しだし、紫音はななかの行動にため息を吐ぐが、ななかは止める気はないようベッドの下に手を伸ばす。

「そんなどころに置いてない。本棚に並んでるから見たかったら勝手に見てくれ。ちなみにロバードはそのカラー・ボックスな」

「えつー?」

「冗談だ。焦るなら、下らない事をしない」

紫音はななかの額を小突くと服を渡し、自分は久遠の部屋を借りて着替えるために部屋を出て行く。

「美夏、お帰り」

「……ただいま」

紫音が着替えを終えて居間に下りると美夏がソファーに座つており、キヨロキヨロと部屋の中を見ているため、紫音は声をかけると美夏は無愛想ながらも返事をする。

「美夏、好きな食べ物つてあるか？ せつかく、歓迎会するんだから主役の好きなものは外せないから」

「……別に何でも食べる」

「わかった。美夏の口に合うものを作るから楽しみにしててくれ

「ふんっ、所詮、紫音の作る料理などたかが知れているだろ？」

「まあ、全力は尽くすよ」

紫音はキッチンに移動すると美夏に好物を聞くと美夏は紫音の料理の腕など信用しないと言い、理音は苦笑いを浮かべていると、

「紫音くん、お待たせ。美夏ちゃんだね。私、白河ななか。よろしくね」

「あ、ああ」

「紫音、手伝いにきたぞ」

「しー君、お待たせ」

「2人ともチャイム鳴らすならすぐに入ってくるなよ」

義之と音姫が手伝いにくるが、紫音は返事がないのに家に上がつて

きた2人を見てため息を吐く。

「まあ、気にするな。こつもの」とだろ」「

「そうだよ」

義之と音姫は紫音のため息をいつもの事だと言い切ると、

「……ねえ、し・船」

音姫の視線が紫音の服に着替えた、ななかを見て止まり、

(これは……ヤバいかな?)

紫音の背中には冷たいものが伝つ。

「しー君、エツチなのはダメだといつも言つてゐよね

「音姫さん、ちょっと待つて下さい。最初に言つておきます。誤解です」

「紫音くん、ななかにあんな事をしたのに」

音姫は完全に何かを勘違いしているようで笑顔ではあるが背中から黒いものをまといながら紫音に言つと紫音は顔を引きつらせながら無実を訴えようとするが、ななかが楽しそうに音姫を煽る。

「しー君、言い訳する気?..」

「待つてください……」

「言訳なんて男らしくありません…… いいからソリに正座なさい……」

「は、はい……？」

音姫は紫音に正座するよう命じたと紫音は音姫の前で正座をせらる。

「……なあ。桜内、あの2人はあのままでいいのか？」

「こつものじだしそうとけ。田河さん、メニコーどうなりの？」

「なかでいいよ。メニコーはパーティーメニコーでこいつと思つただけど、お米はやつも紫音くんが炊いていたからおかずかな？」

美夏は田の前で起きている状況に顔を引きつらせて義之に聞くが、義之は下手に紫音を弁護すると自分にも飛び火する可能性もあるため、紫音を見捨ててななかと料理をはじめようとするが、

「それじゃ始めるかと思つたけど」

「けど？」

「なかなか料理できるのか？」

義之も紫音と同じくななかが料理できるか疑問に思つたようにななかに聞く。

「できるよ。紫音くんにも言われたけどそんなにわたしつて料理できないように見えてるかな？」

「見える」

「ガーン」

ななかは頬を膨らませるが義之はななかをからかい、ななかもそれになると、

「桜内、白河で遊ぶな。それに美夏としては桜内が料理できる方が意外だ」

「それもやうだな。ななかそろそろ始めるか？」

「やうだね」

美夏は呆れたようにため息を吐き、2人で料理を始めだし、

「そろそろ助けろよ」

「しー君、聞いてるの？」

「聞いています」

その後、音姫の勘違いによるお説教は杏からの電話来るまでの間30分も続いた。

第1-3話

「今日はここまで。悪いけど、俺は今日は先に上がらせて貰つよ」

部活時間終了の鐘が鳴ると剣道場には久遠の声が響く。

『久遠、珍しいな。今田は自主練しないのか？』

「今日は、ちょっと用があつて」

久遠が片付けを始めだす様子に部員達は首を傾げ、久遠が苦笑いを浮かべた時、

「何だ、女か？」

『八雲 遊月』がニヤニヤと笑いながら久遠に声をかけると部員達はざわめき立つが、

「違うよ。部活前に説明しただろ。今日は従妹の歓迎会をするから早く帰るって、だいたい、遊月は来るって言つたじゃないか。どうして変な事を言つのかな」

「その方が面白いだろ」

久遠はため息を吐くと遊月は楽しそうに笑う。

「遊月先輩、ふざけないで下さー」

「冗談だろ。あまり熱くなるなよ。それよりタクト、お前も来るん

だよな」

遊月の様子を見て久遠達の1つ下の後輩である『天海 タクト』は遊月を止めようとすると遊月は苦笑いを浮かべ、タクトに聞き返すと、

「参加します。天枷さんとは同じクラスですし、なにより行かないと遙がつるわいと思しますので」

タクトは従妹である遙に巻き込まれたと言いたげにため息を吐くが、部員からはタクトの言葉に舌打ちや冷やかしの言葉が飛ぶ。

「相変わらずラブラブだな？」

「そんなんじゃないです。遙は唯の従妹です」

「こと」とは結婚できるだろ」

「何で、 そうなるんですか？」

遊月は一やりと笑うとタクトをからかいに移るがタクトはため息を吐きながら否定した時、

『タクちゃんボクのことキライなの?』

部員達が遙の真似をしてタクトをからかう。

「ハイハイ、みんなそこまで」

「それもやうだな。俺もずっとタクトで遊んでるけど腹じゃないし

「なら、変なことを言わないでください」

「それは無理だな。何より俺は人をからかうのが大好きだからだ」

久遠はため息を吐きながら割つて入ると遊月はタクトをからかうのを止めず、

「遊月先輩、いい加減にしないと怒りますよ」

「怒つてもいいが。タクト、お前が俺に勝てると思ってるのか?」

タクトの頭には血が昇りきったようで竹刀を手にするが、遊月はタクトを挑発するように笑い、タクトの挑戦を受ける。

「……まったく、あの2人は」

『なあなあ、久遠、天枷つて可愛いのか?』

「従妹というひいき目なしにしても可愛いと思いますけど。どうしてそんなこと聞くんですか?」

『久遠、今度、紹介してくれ』

久遠が遊月とタクトの様子にため息を吐くと部員達は美夏に興味を持ち、久遠に詰め寄るが、

「無理。俺は先に帰るから最後の人は道場の鍵を頼むよ」

「天枷を紹介しないのは独占欲か?」

「……違つよ」

久遠は断るとタクトを倒した遊月が戻ってきて久遠をからかうように言い、久遠は大きなため息を吐く。

「失礼します」

剣道場を出て遊月と別れると久遠とタクトは演劇部にいる杏と遙、新歓までの手伝いをしている茜の3人を迎えて演劇部の部室に顔を出すと演劇部員達が深刻な表情で集まっている。

「遙、何かあつたの？」

「えつとね。ちょっと困ったことになっちゃたの」

タクトが遙に声をかけると遙は困ったように笑い、役者の1人が舞台から落ちてしまいケガをしてしまったと言つ。

「その人は大丈夫なんですか？」

「全治3週間の骨折、舞台には立てないから新歓には間に合わないし、役者の人数はギリギリだから人も足りない。今から本を直すほどの時間もない」

タクトは心配そうな表情で聞くと杏が淡々とした口調で事実だけを告げると、

(何かいやな予感が)

久遠はその言葉にいやな予感がする。

「誰か。手伝ってくれる人がいればいいんだけどねえ。久遠くん」

「無理」

「大丈夫だよ。久遠くんなら」

久遠の予感は的中し、茜は久遠に代役をやれと言うと久遠は直ぐに否定をするが茜は笑顔でその答えはないと言いたげに言う。

「なにを根拠に？」

「久遠、いい声してるし。物覚えも悪くない。なにより

「見た目がいい！！ ねつ、タクちゃんもそう思つよね？」

「久遠先輩なら問題なく出来ると思います」

久遠はため息を吐きながら言いつゝ杏と遙がタクトに同意を求めるとなタクトは大きく頷く。

「ねえ、ダメかな？」

「無理。剣道部のだつてあるし」

「仕方ないわね……久遠、お願いできなかな？」

久遠はそれでも断ると杏は一度頷いた後、上目づかいで懇願して久遠に顔を近づけてきて、

「杏、近い！？ 近いってば！？」

「ねえ。ダメ？」

「わかつたよ。わかつたから少し離れて」

久遠は顔を真っ赤にして杏から離れようとすると、茜と遙が久遠が逃げられないように久遠をつかみ、杏の顔をすぐそこにある状況から逃げ出すために久遠は頷いてしまった。

「さすが、紫音ね。久遠の弱点をすべて押さえている」

「どうして兄さんが出て来るの？」

杏は久遠の返事を聞いてくすりと笑うところには紫音が一枚噛んでいると言つ。

「ケガの具合がわかつてすぐに紫音くんに相談したの。せつしたら、俺は新歓当日は店があるし時間ないから久遠に頼めと」

「久遠を落とす方法を教えてもらつたわ」

「さすが、紫音先輩だよね」

「……兄さん」

久遠は話を聞いてすべてを理解したようでため息を吐く。

「久遠、これ台本ね。主役だから頑張つてね」

「……あの、杏さん、主役ひでござるのせどりこつ事ですか？」

杏はため息を吐いている久遠に追い打ちをかけると久遠は顔を引きつらせるが、

「何を言つてゐる。久遠くんは主役の子の代わりなんだから主役に決まつてゐるじゃない」

「ちよつと待つてよ。俺は素人なんだよ。主役なんて無理！－！ 時間だつて無いし、セリフを覚えきれないよ」

茜は即たり前だと言うと久遠は無理だと全力で拒否する。

「大丈夫、ヒロインの杏ちゃんと熱烈なラブシーンもあるしね」

「関係ないよ！？」

「ふつつかものですが」

しかし、杏、茜は聞く耳を持たずに久遠を自分たちのペースに巻き込もうとし、

「もう、好きにして」

「久遠、陥落」

久遠はもう何を言つても無駄だと判断したようでため息を吐く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0797p/>

誓いの桜

2011年10月7日15時15分発行